

の現代政治分析においても重要な参照点となることは疑いない。「建国の父」は「歴史」のみならず「現在」をも雄弁に物語るのである。研究者のみならず、広く一般読者にも手に取っていただきたい。

(大澤 傑・愛知学院大学文学部)

アンソニー・リード、『世界史のなかの東南アジア——歴史を変える交差点』上巻・下巻、太田 淳；長田紀之（監訳）、青山和佳；今村真央；蓮田隆志（訳）、名古屋大学出版会、2021、（上）ix+380+6p.（下）vi+381-712+46p.

本書は東南アジア近世・近代史の泰斗、アンソニー・リード（Anthony Reid）が2015年に刊行した *A History of Southeast Asia: Critical Crossroads*（以下 *Critical Crossroads*）を邦訳し、リードの研究キャリアと本書の意義を簡潔明瞭にまとめた解説を付した書籍である。東南アジア史研究の先導者による通史の邦訳版は、日本の東南アジア史や地域研究の発展に資するのみならず、一般読者の東南アジア理解を促進し、将来的な国際関係発展の一助ともなる成果である。邦訳版では原著の独創的な用語を、本来の意味を損なわず日本語化し、リードの意図と歴史観を十全に伝えている。例えば、本書のキー概念の一つとなる近世後期東南アジアの Vernacularization という用語は、安易に「現地化」や「土着化」と邦訳せず、「民俗語化」としたことで、東南アジア地域が歴史的に発揮してきた外部世界との接続にみられる感受性、そしてその奥にある多元性・多様性の包摂という特徴を読者に伝えようとするし、少なくとも、その意味を考えさせられる。解説でも述べられるように、邦訳者たちが著者と密な連絡をとった努力が結実したと評価できる。

本書が展開する東南アジア史に通底する3つの独自性（地理環境条件、女性の役割、非国家社会）や、近代国家領域を超えた東南アジア全体史の意義については、監訳者による解説や別の書評において説明されているため〔桃木 2023〕、ここでは繰り返さない。この邦訳版に対する書評では、本

書 *Critical Crossroads* が日本の東南アジア史研究とどのような関係にあるのか、そして本書を受けて、今後の東南アジア史研究はいかなる課題を見出し得るのかという点について、評者の意見を述べてみたい。その際に、日本の東南アジア史研究を代表する成果として、『岩波講座東南アジア史』第1～9巻〔池端他 2001〕を中心に見ていく。

日本の東南アジア史研究と「商業の時代」

戦後日本において、東洋史の一分野として創生された東南アジア史（初期は南方史や南洋史と呼称）は、1960年代以降、日本と東南アジア諸国との間の政治経済関係の緊密化や、研究者の現地滞在によって得られた深い理解・洞察を背景に、長足の進歩を遂げた。歴代の東南アジア史研究者たちは、欧文史料や西洋植民地資料の利用にとどまらず、現地に残された王国系譜論、漢文、貝葉文書など多様な史料を駆使した実証研究により、政治経済の中心地域だけでなく、地方の歴史まで迫る研究を蓄積してきた。また他地域に比べ史料の利用が限られるという課題を乗り越えるべく、文化人類学、生態学、農学の知見を取り込んだ、学際的な東南アジア史研究を展開し、日本の東南アジア地域研究の成長を牽引するという貢献も果たした。こうした東南アジア史研究の成果をまとめた通史として、岩波講座東南アジア史全9巻が2000年代初頭に刊行された。各巻の責任編集者を筆頭に、東南アジア史学を牽引する多くの日本人研究者が寄稿したこのシリーズは、考古学研究に基づく古代史から戦後の経済発展までを網羅した、当時の最先端の学術的知見を提示するものである。中でも近世の東南アジアを扱った第3巻『東南アジア近世の成立（15-17世紀）』、第4巻『東南アジア近世国家群の展開（18世紀）』、そして第5巻『東南アジア世界の再編（19世紀）』の一部は、リードが提唱した「商業の時代」（岩波講座東南アジア史では「交易の時代」と呼称）という、東南アジア史の画期的な時代区分と歴史観の強い影響のもとで論述されたといえる。

リードの「商業の時代」というアイデアを広めたのは、1980年代から90年代初頭にかけて出版された全2巻の著作 *Southeast Asia in the Age of*

Commerce 1450–1680 [Reid 1988; 1993] であった。知られているように、リードはこの作品で、アナール学派の社会史・全体史のアプローチから近世東南アジア世界を捉え直し、一つのまとまりをもつ独自の地域として東南アジア近世史を描いた。その最重要論点は、東西交易の中継地及び希少な熱帯産品の輸出地であった近世東南アジアでは、内外の社会文化交流を促す商業の発達、大衆の物質文化の変容、宗教改革、また新たな統治体制の形成につながったという主張である。この商業の隆盛を原動力とする現地社会の発展は、東南アジア地域全体の歴史的特徴として強調される。この「商業の時代」という歴史観と地域枠組みを、日本の東南アジア史研究は積極的に受け入れていった。そこには、東南アジア史研究が地域研究と連携しつつ、中国やインドとは異なる独自の地域として東南アジアの実体を追求していたことも背景にあった。そして岩波講座東南アジア史の第3巻の各章では、商業を東南アジア世界の発展をもたらす原動力として捉える視点から、15世紀から16世紀の近世東南アジアにおける社会経済の発展や国家形成が論じられる。そして、第4巻と第5巻では、その後の17世紀の「危機の時代」を経て、18世紀から19世紀の重要な政治経済の転換についても、新たな商業ブームに着目して論じられている。このように、日本の東南アジア史研究はリードの「商業の時代」というテーゼに親和性を見出し、それに呼応しながら新たな研究や既存研究の再解釈を進めた。しかし、岩波講座東南アジア史の意義は、単に「商業の時代」を援用した議論を展開したことには尽きない。そこでは「商業の時代」が残した重要な課題への挑戦が試みられた。

近世後期への着目から新たな東南アジア通史へ

岩波講座東南アジア史において、重要な歴史概念として提示されるのが「歴史圏」である。第1巻と第4巻の桜井由躬雄による総説では、「歴史圏」とは自然環境、言語文化、社会経済、政治秩序など共通した文化文明複合をもち、中心都市と周辺からなるネットワークに包摂される歴史的領域と定義される。多様性を抱える東南アジアには常に複数の歴史圏が存在し、その領域や内実は歴史状

況に応じて変化した。そして「商業の時代」において、東南アジアの歴史圏は外部世界との接触と交易成長の影響の下、実体をもった力強い発展を遂げた（第3巻の各章）。さらに第4巻にかけて、商業の時代に発展した各地の歴史圏は、17世紀半ばの東西貿易の衰退、気候変動、そして蘭東インド会社の貿易独占といった危機を経て、18世紀には新たな商業ブームの下、再編されたことが強調される。特に、清朝中国の人口爆発と経済活性化、またイギリス勢力の拡張に伴う東南アジア貿易の拡大がみられた18世紀から19世紀前半を、「華人の世紀」という画期的な時代設定として提唱する。この時期に大陸部の諸王朝による政治統合や、島嶼部の植民地分割につながる社会経済変容が起こり、現代東南アジアの国民国家体制の核となる「歴史圏」群が形成されたことが、各章の詳細な地域別研究を軸に示される。

そして華人の世紀における歴史圏の発展という論点は、リードの「商業の時代」の限界を乗り越える試みでもあった。「商業の時代」に対する重要な批判は、「17世紀の危機」による繁栄の終焉で議論を閉じたため、その後の東南アジア世界は19世紀後半の植民地時代まで停滞期にあったという断絶的なヒストリオグラフィーにとどまっているという指摘であった（例えば早瀬・桃木 [2003: 68]）。すなわち、植民地化こそが東南アジアを変革し近代に導いたという、西洋中心史観を乗り越えるに至らなかったといえる。これに対し、18世紀の東南アジア歴史圏の発展を論じた岩波講座東南アジア史は、「今日に直接つながる過去」として新たな東南アジア近世論を構築し、「商業の時代」から20世紀後半の「開発の時代」を一貫した流れで捉える新たなヒストリオグラフィーの形成に挑戦したといえる。

他方、リードは「商業の時代」に対する批判を、四半世紀後に出版した本書 *Critical Crossroads* においてどのように乗り越えたのだろうか。評者は、岩波講座東南アジア史で示された近世後期18世紀の東南アジア世界の自律的発展論は、*Critical Crossroads* におけるリード独自の東南アジア通史を理解するうえで、最も重要な局面に相当する議論だと考える。邦訳版の第8章「民俗語的アイデンティティ

1660-1820年」において、リードは近世後期、17世紀末から19世紀初頭の東南アジア世界の発展を捉えるうえで、「民俗語化 (Vernacularization)」という概念を提示する。これは17世紀の危機以降、コスモポリタニズムの影響が退潮傾向になったことで、東南アジア各地で内の一貫性を持ったアイデンティティ形成が進んだことを指す。大陸部では諸王朝による統治体制の凝集統合が進み、島嶼部各地でも宗教や言語の発展による文化的均質化が見られた。商業の面では、国際市場への依存を弱めつつも、都市経済が国内商業への依存を強める過程で、各経済圏内では貨幣流通や市場が発達した。さらに第9章「中国化した世界の拡大」では、18世紀の中国経済の拡大と需要に刺激された東南アジア貿易の成長に注目し、そこで新たな商業や政治秩序が発達したことを主張する。近世後期の「民俗語化」は、岩波講座東南アジア史の「歴史圏」の発展とシンクロする議論であり、近世後期18世紀を「華人の世紀」という画期的な時代と捉える歴史認識も共有する。この近世後期に注目した新たな議論により、リードは近世前期の商業の時代、近世後期の民俗語化及び華人の世紀、そして近代の植民地時代を、断絶ではなく、有機的連関を持つ歴史ナラティブとして提示することに成功した。むしろ、これは日本の東南アジア史研究が先行して、リードの歴史研究に影響を与えたということではない。本書 *Critical Crossroads* でも言及されるように、リードはヴィクター・リーバーマンによる大陸部東南アジアの持続的な国家形成の研究に学びながら [Lieberman 2003]、新たな近世論を模索した。またリードが編集し、桜井も寄稿した *The Last Stand of Asian Autonomies* [Reid 1997] の諸論考は、東南アジア近世史を「近現代史とつながる近世史」に進化させ、リードが東南アジア通史を構想する上でのブレイクスルーになったと考えられる。また18世紀のメコンデルタにおける現地経済と華人商業に着目した *Water Frontier* [Cooke and Li 2004] で、リードは「華人の世紀」を軸とした南シナ海経済圏を論じている。リードは商業の時代を提唱した後も、東南アジア史の探求と知的交流を続け、その近世史のイメージと意義を大きく塗り替えた。その成果が近世から近現代へつなが

る、躍動的な東南アジア通史 *Critical Crossroads* に結実したのである。邦訳版の解説で賛辞されたように、リードの本書はまさに *Synthesis* (統合の書) であり、そこには日本の東南アジア史研究の長らくの営為も深く組み込まれているといえよう。

社会経済史研究への課題

最後に、本書 *Critical Crossroads* が提示した多岐にわたるメッセージは、今後の東南アジア史研究にどのような影響を与えるだろうか。ここでは評者の専門である社会経済史学に関われる課題を簡単に述べたい。リードは近世後期の東南アジア社会経済のダイナミズムに着目し、断絶的な西洋中心史観を塗り替えようとした。そこで新たに提示されたのは、18世紀から19世紀半ばにかけての「華人の世紀」と、1970年代以降の「開発の時代」には、コスモポリタニズム、起業家精神、また自律的な農民といった、「商業の時代」と共通する現地経済の原動力を基盤とした商業再活性化が起こったというものである。一方、それら時期の間に当たる植民地時代はその原動力が後退し、一人当たりGDPといった経済指標も停滞・下落したという、商業の衰退が強調される。植民地化が現地経済にとって衰退・搾取の時代をもたらしたという認識は新しいものではない。ここで重要なのが、その経済的苦境も含めた植民地時代の社会経済変容を、近世以来の商業発展の流れの中で理解する視座が示されたことである。この新たな視座から東南アジア経済史を再構築するためにも、植民地時代の経済変化と近世の商業発展との関係を、詳細に検証する実証研究が求められる。そして近年の東南アジア経済史研究は、長期にわたる経済発展を詳細なデータから検証することに力を注いできた。例えば、比較的豊富な史料が利用可能なオランダ領東インド(現インドネシア)に関して、植民地時代の1870年から1930年における域内各地の新たなGDP推計は、全体的な一人当たりGDPの上昇と域内の格差(例えば従来の推計よりジャワもスマトラも高くなるが、後者の方がより高い)を解明した [Bosma and van Leeuwen 2023]。さらに、それら各地の経済パフォーマンスの相違を生んだ原因は、歴史的に醸成された現地社会の制

度の違い（例えば西スマトラ・ミナンカバウ族の合議による「民主的」秩序と西ジャワ・スダ族のヒエラルキー秩序）が決定的な役割を果たしたことも論じられている [De Zwart 2021]。すなわち、質的・量的データを駆使する新たな研究は、植民地時代に生じた経済変化を単に外圧に帰するのではなく、域内外からの影響に反応した現地社会経済の内発的發展として捉える成果を積み上げ始めている。また、上記 De Zwart [2021] において、現地社会制度の歴史の実態を論じた重要な先行研究として、大木昌や加納啓良といった日本の東南アジア史研究者の成果も参照されている（両者は岩波講座東南アジア史にも参加）。さらに実証分析の面でも、一橋大学経済研究所による「アジア長期経済統計」プロジェクトは、東南アジア諸国に関する植民地期以降の歴史経済データの収集整理と分析を進めてきた。こうした日本の東南アジア経済史研究の蓄積を、近世から近代を連続・横断的に捉える視点から、さらなる実証研究に生かすことで、ヒストリオグラフィーの「歪み」が修正されていくことが期待される。リードが Critical Crossroads で提示した、東南アジアにおける商業盛衰の歴史的展開の妥当性と意義は、そうした実証的歴史研究の積み上げによって問い直されていくことで、より「正当な」東南アジア史の構築につながるであろう。

（小林篤史・名古屋大学大学院経済学研究科）

参考文献

- 早瀬晋三；桃木至朗（編）。2003. 『岩波講座東南アジア史 別巻 東南アジア史研究案内』東京：岩波書店。
- 池端雪浦他（編）。2001. 『岩波講座東南アジア史』第1巻～第9巻。東京：岩波書店。
- 桃木至朗。2023. 「書評 世界史のなかの東南アジア」『社会経済史学』88(4): 430–435.
- Bosma, Ulbe; and van Leeuwen, Bas. 2023. Regional Variation in the GDP per Capita of Colonial Indonesia, 1870–1930. *Cliometrica* 17: 365–386.
- Cooke, Nola; and Li, Tana, eds. 2004. *Water Frontier: Commerce and the Chinese in the Lower Mekong Region, 1750–1880*. Singapore: Rowman &

Littlefield Publishers, Inc.

- De Zwart, Pim. 2021. Globalisation, Inequality and Institutions in West Sumatra and West Java, 1800–1940. *Journal of Contemporary Asia* 51(4): 564–590.
- Lieberman, Victor. 2003. *Strange Parallels Southeast Asia in Global Context, c. 800–1830*, Vol. 1, *Integration on the Mainland*. New York: Cambridge University Press.
- Reid, Anthony. 1988. *Southeast Asia in the Age of Commerce 1450–1680*, Vol. 1, *The Lands below the Winds*. Chiang Mai: Silkworm Books.
- . 1993. *Southeast Asia in the Age of Commerce 1450–1680*, Vol. 2, *Expansion and Crisis*. Chiang Mai: Silkworm Books.
- , ed. 1997. *The Last Stand of Asian Autonomies: Responses to Modernity in the Diverse States of Southeast Asia and Korea, 1750–1900*. New York: St Martin's Press.

高畑 幸. 『在日フィリピン人社会——1980～2020年代の結婚移民と日系人』名古屋大学出版会, 2024, vi+317p.

2022年末現在、日本には約300万人の外国人が暮らしており、フィリピン人はその約1割を占める。本書は、在日フィリピン人研究を長年にわたって牽引してきた高畑幸による待望の単著である。本書の構成は次のとおりである。

- | | |
|-----|--|
| 序章 | 在日フィリピン人とは誰か |
| 第Ⅰ部 | 結婚移民 |
| 第1章 | 在日フィリピン人女性の労働——興行と介護を中心に |
| 第2章 | フィリピン人結婚移民の介護職への参入——社会的評価獲得の手段としての介護労働 |
| 第3章 | 在日フィリピン人の自営業者——「主婦」となった女性たちのビジネス |
| 第4章 | 在日フィリピン人の第二世代——10万人を超える不可視的マイノリティ |